

関西帰国生親の会かけはし会報

Vol.48 関西帰国生親の会かけはし <http://www.ne.jp/asahi/kakehashi/kikoku/>

街路樹がイルミネーションで彩られる季節になりました。おかげさまで、今年も学校案内を無事に発刊することができました。多くの方々のお力添えに心より感謝申し上げます。対外的な活動は、イベントのオンライン開催が長く続きましたが、11月には「レッツトーク」を大阪で実施し、顔を合わせておしゃべりできる喜びをかみしめました。来年、よりたくさんの方とお会いできることを楽しみにしています。

かけはしには、「海外赴任先に学校の選択肢があり、かえって悩んでしまう」「学校選びに不安があるので単身赴任がいいのかと考えてしまう」などの教育相談も寄せられます。そこで、今号では「海外で子どもが学ぶということ」をテーマといたしました。海外のインター校で教鞭をとられている日本人の先生に、多国籍の子どもが集う学校とはどのような感じなのかをうかがい、「違うことは考えるきっかけになる」とご示唆いただきました。また、会員による座談会を持ったところ、子らが異文化体験を通して多様な価値観に接したことが語られ、たくましさに改めて気づかされました。この特集が、赴任前だけでなく在外中や帰国後の皆さまのお役に立つことができましたら嬉しいです。

今回の「かけはしレポート」ではインター校に子どもを通わせている親の意識に注目し、学校の状況、学校への思い、そして、親として学校とどのように関わっているのかなどの意見を聞いてみました。「異文化でドッキリ!」「イギリス訪問記」には懐かしいご近所さんたちとの思い出がぎゅっと詰まっています。海外での暮らしには戸惑いや困難もありますが、周りの方々の助けを得て、親子で乗り越えた経験がこれからもご家族の宝でありますよう願います。

関西帰国生親の会かけはし



目次

* ご挨拶	1
* 特集 - 海外で子どもが学ぶということ -	
「子連れで海外赴任する人へ」 International School of Amsterdam 教諭 Ham-榊田美恵子	2
親が感じた「帰国生でよかったこと、苦労したこと」 かけはし会員	5
* かけはしレポート (第26回) 子どもをインター校に通わせる親の思い	7
* 異文化でドッキリ! <ご近所(さん)編>	10
* 海外の学校を紹介します 「フランクフルト日本人国際学校」 C.N.	12
* イギリス訪問記 かけはし会員 H.O.	13
* 学校案内編集チームより 『帰国生への学校案内《関西》2023』の発刊を終えて	
かけはしPRチームより SNSで発信	14
* 「レッツトーク 2022 秋」実施報告・会員のつぶやき・編集後記	15
* 『帰国生への学校案内《関西》2023』・ご賛助くださっているみなさま	16

「子連れで海外赴任する人へ」



International School of Amsterdam (ISA)

教諭 Ham-榊田 美恵子 先生

結婚を機に海外生活を始め、インドネシア、ベトナム、タイ、フランス、チュニジア、オランダ、日本、ザンビアに駐在同行し、現地のインター校や日本語補習校および滞在国内から頼まれた国のプロジェクトの仕事を行い、オランダに帰国後はライデン大学、マーストリヒト南大学で日本語講師として教鞭をとる。2006年からISAにてIBシラバスに則った日本人生徒バイリンガル教育に携わり現在に至る。

- 一 先生の多国にわたる海外でのご経験からお感じになられたことはどのようなことですか。
- ◆ 各国には長所と短所があり、開発途上国、先進国に関わらず、その国に住むとその文化や生活は独特のものであり、いかに大切なものなのかははっきりと感じます。観光ではわからない多くの発見があり、私たちは物事の一面しか見ていないのだと思います。海外に住んでいる間は、現地の生活にできるだけ受け込み、文化や語学を学ぶように努め、色々な現地のプロジェクトに加わりました。それらを通して異なった視点、宗教観、美など、また国同士の歴史や関係をだんだんと理解できるようになりました。
- 一 International School of Amsterdam(アムステルダム国際学校)について教えていただけますか。
- ◆ 生徒数は約 1300 人(内 5~6%が日本人生徒)、国籍は 60 カ国以上を有しております。大学進学に直結する高校生(G9-12)は、皆さんできるだけ卒業まで在学することを心がけていらっしゃいます。私は 6~12 年生の生徒に IB の日本語 A(第 1 言語を言語 A と呼びます)「言語と文学」のコースを教えています。
- 一 貴校の IB の日本語 A「言語と文学」と日本の国語の違いについて教えていただけますか。
- ◆ 当校では国際バカロレア (IB) のカリキュラムに沿って教科作りをします。單元ごとに 12 の概念のうち 1 つを主軸として選び、他の関連する概念とも結びつけ作品や資料を選びます。日本はもちろん、さらに住んでいるオランダやヨーロッパおよびアフリカ、中近東に関連した文学、非文学作品を扱います。教科書はなく、そうした教材をもとに作品と筆者の色々な要素から文章分析をしながら思考を高め、それから得たものを反映させた自分の作品(小論文、プレゼンテーション、演劇、ポスター、展覧会の学芸員としての説明など)を作成します。この一連の学習は、取り上げた作品からの受容だけでなく能動的に考え論理性の高い自分の作品を作り上げるのに効果的です。生徒の疑問点、新しい考え方の発見や気づきに注意を向け、授業中にも取り上げていきます。他教科との関連もよく考えて教材を吟味し、広い視野と批判的な目で検討し、国際理解を深めることも行います。ジャンル別では、古典が日本の国語の授業より少ないですが、メディア・リテラシーにおいてはより広範囲にまた深く学習していると思います。文学、非文学ともに、文章分析と小論文、あるいはプレゼンテーションのような口頭によるものはどの單元にも含まれています。
- 一 インター校での学びを通して子どもたちはどのように成長しているとお考えですか。
- ◆ 日常的なことから自分自身の疑問や興味を引き出し、それを追求できるようになり、その探求のプロセスに大きな楽しみを感じるようになります。また、失敗をしても振り返る中でその原因を探ることの重要性を見出し、次につなげようとする継続的、能動的な行動をとることができます。ボランティア活動が多いので、社会の多様性や社会の不平等な部分を明らかにすることができ、それらに対してどんな活動をすべきかを考え実行に移します。多国籍の多様な仲間に関わり、色々な視野で物事を見る経験を通して、自分の文化や価値観だけではないことを知ることができるようになります。反対にマイナス点は、子どもた

ちが成長の過程で周りの社会との日常的な関係がなかなか取れないことです。学習している言語が住んでいる国で使用されていない、あるいはその言語を話す人たちが少ないなどといった場合は、言語の壁は大きく、子どもたちが現地の社会の一員となる場面はそんなに多くないでしょう。特に開発途上国では困難なケースが多いです。



学校エントランス

一 日本人生徒の長所はどんなことだとお考えになりますか。

- ◆ どの教師も言っていますが、日本人生徒はとにかく真面目です。出される課題には一生懸命取り組み、必ずその期限を守ろうと最大限の努力をします。困っている人を助けようという自発的な行動が多く見受けられます。言葉の壁など関係なく、常にそういうことに目を配ることができます。公共における責任もきちんと感じ、行動をしています。

一 生徒や保護者の方はどんなことを学校に望まれ、どんなことでお悩みだとして先生はお考えになりますか。

- ◆ 非英語圏で日本人学校がない場合、インター校に入れることが多くなります。英語かフランス語で学習する学校を考えていらっしゃるものがほとんどです。こうした地域のインター校では、授業の一環として日本語を学ぶことのできるカリキュラムはないことが多いです。したがって、第1言語としての日本語・国語を学ぶためには、オンラインや家庭教師、あるいは、中3まで日本語補習校など学校以外で勉強することになります。昨今は他国のインター校を経由して来ることもあり、第2言語の英語やフランス語のレベルが高い生徒が転入してくることもあります。しかし、日本から来た生徒は、残念ながら、たいていビギナー・レベルからスタートします。こうしたことから、保護者も生徒も、英語での授業や課題をこなすためのより良い英語のサポートがたくさん欲しいと考えられていると思います。特に、初年度は大きなストレスが生徒にはあるので、すぐに思った通りの成績が出ないことも特徴です。保護者は、異なったプログラムの中で期待通りの成績がすぐには取れないことに不安を覚えていらっしゃると思います。それに対し、日本人学校もあり、インター校もいくつか存在し、選択肢があるという地域の保護者の方たちは、子どもの年齢によってその考えや不安は大きく異なると思います。まず、幼稚園児や小学生がいらっしゃる保護者の方は「海外に出たのだからせっかくなので、英語で勉強する機会を持たせてあげたい」と考えられているようです。こちらは、新しい環境で子どもがどのように馴染んでいくのか、また学習もスムーズにいくのかとご心配になることが多いと思います。しかし、こうした年齢の場合は、子ども同士が大変ストレートに話し、間違いなども怖がらないので、おおよそ半年ぐらいで英語でのコミュニケーションが取れ、馴染んでいるようです。一方、小学5年生以降に日本にお戻りになる時には、日本の中学・高校入試や編入といったことがあるので、日本語をどう学習させていったらいいのかと考えていらっしゃると思います。通っているインター校で日本語が正規の科目として授業中に行われることを希望していらっしゃる場合があります。高校で転入、大学入試を念頭に置いていらっしゃる場合は、大学入試の際に必要な科目やレベルを期待されると思います。とはいえ、インター校で日本語の科目がある学校は大変限られているので、たくさんの悩みがおりだと思えます。幸い、日本語の科目がある当校では、他教科に関して、塾やオンラインの家庭教師を使って入試対策をしている生徒もいるようです。学校で使われる教育言語や英語での課題は日本人生徒でなくても時間がかかります。そのため、生徒の睡眠時間が著しく短くなっています。こうしたことの積み重ねは健康に問題が生じるので、どうしようかと悩んでいらっしゃるのではないかと思います。私も生徒には7時間は寝るようにと勧めています。

一 日本での入試を念頭に置き、帰国のタイミングを見計らっている子どもたちや保護者の方にどのようなアドバイスをなさいますか。

- ◆ いろんな方がいらっしゃるのので、これといったアドバイスをするのは困難です。大切なことは、保護者の方が各々の教育環境を中期的、長期的に見て、子どものアイデンティティーをどう育てるか、またどの

ように一貫性を保つ教育を受けさせるかということを決めておく方が良いと思います。インター校といっても千差万別のプログラムがありますので、駐在の先々で多少の変更を余儀なくされることもあります、一貫したコアな考え方を持っていればそれを軸にどう合わせていくかが決まってきます。

入試は1つのテストですから、傾向と対策をすればテクニカルな部分は十分に対応できると思われます。けれども、日本語の文章分析をする際に、どういう問題提起で、どういった観点で、どう分析し、それらをどのように文章化し可視化して自分以外の人間にどう効果的に伝えることができるかは、テクニカルなことの前に思考能力として日頃から養われるものだと思います。ですから、保護者も子どもも新聞記事を読み、その時々気になるテーマをディベートのようにして話し合ってみるのもいいと思います。思考能力は1日や1週間で出来上がるものではないからです。保護者の方も子どもの興味や成長に合わせて、自分の興味とは異なったことを勉強することになるので、切磋琢磨ができて良いのではないのでしょうか。

一 海外での経験は子どもたちにどんな意味があると思われますか。

◆ 海外での経験を持った子どもは、異文化の中で自分づくりをしています。自分自身のこともよくわからない中、自分とは全く異なった様々な文化を持つ仲間たちと共に何らかの判断をしながら毎日過ごしていき、最終的には自分を肯定し、何者であるかをしっかりと意識するようになるでしょう。その間、アイデンティティーは1つではなく、複数あることに気がついていきます。そういった環境で育つと、早いうちから、多様性があること、世の中が単純ではないこと、事の是非がそう簡単につかないことを理解し、心が不安定な時期を経て、その上で色々な決断をするようになります。ストレスが多い中、自分というものを見つめ、強い意志で推し進めていく力がついていきます。障害には比較的強い上、うまくいかなかったとしても自分自身を挽回させる力を持っています。保護者の方は、社会に「安心できる場所、環境」を見つけ維持し努力すればなんでも叶うのではなく、努力をしてもうまくいかないこともあるが、次のチャンスへ向かわせる力や思考力を育てるという大きな役割を持っていると思います。本人の思考能力、運用能力、概念や分析力、さらに常に肯定的に進めるような自分を作っている教育や環境が備わっていれば、人間はいくらでもどこでも成長できるのではないのでしょうか。



教室の様子

一 海外で学んでいる子どもたちや帰国生、保護者の方へのエールをお願いいたします。

◆ 違うこと、差異があることは考えるきっかけになります。海外に出ても、日本に戻られても、そういったことをいつも意識して尊重して見ていかれると良いのではないかと思います。長所はそのまま伸ばしていき、短所と思われたところは後から経験を積んで長所へと持っていけば良いのではないのでしょうか。日本では英語がある程度できるとバイリンガルというレッテルが貼られます。本人もまるで特別な能力のように勘違いをしてしまうことがあります。しかし、ヨーロッパでは国同士が地続きですから、英語のほか隣国の言葉(フランス語やドイツ語、スペイン語など)ができることが日常的になっていることを理解しておく方が良いのではないかと思います。本当は、海外生活の経験で英語と共にもっと素晴らしいものを身につけたのだということを実感していただけたら、さらに大きな自信につながると思います。自分を鋭敏に見直す機会ができ、さらに他者も含めた多様性のある考え方ができるようになったことに自信を持って、ご自分の進みたい、探求したい事柄へ向かっていっていただきたいと思います。その過程は決して単純なものではありませんが、その過程も含めて大きな価値があるものと思います。頑張ってください。

一 お忙しいところ、貴重なお話をどうもありがとうございました。

インタビューを終えて

8カ国にわたる海外生活でお仕事をされてきた先生のお話は一つひとつ心に響いてきます。多様性のある考え方、思考能力、物事を前向きに捉える姿勢を身につけたいと強く思いました。

親が感じた「帰国生でよかったこと、苦勞したこと」

海外で経験したことは子どもたちにどんな影響をもたらしたのでしょうか。帰国後それぞれの道を歩んでいる子どもたちについて、会員に自由に話してもらいました。海外滞在時の子どもの年齢も性別もまちまちですが、親子で乗り切ってきた駐在経験がそれぞれの「今」につながっていることを再確認した時間となりました。

ことばに関すること

😊 8歳で米国から帰国した息子は「英語を聴く耳が違ふと感じる」と言う。小さいときに海外に行くと「外国語を聴く耳」が持てるようになるのかも。その代わり受験英語はちゃんと勉強しないとダメ。

😊 日本の中学で英語を学び始めた頃、勉強としての英語は好きな科目ではなかったが、渡米後にコミュニケーション手段としての英語を知ったことにより、その能力を落とすたくはないという動機付けができて、帰国後は積極的に英語の勉強をするようになっていた。

😊 英語圏ではなかったし、日本人学校だったので英語がしゃべれるようになったわけではないが、「英語がしゃべれるといい」ということは実感し、帰国後に英語の勉強をするときのモチベーションになったと思う。

😊 オンラインゲームでも、いろいろな国のいろいろな友達とつながることに抵抗がない。日本のコミュニティではなく海外のコミュニティで楽しくゲームに参加している。

😞 大学で第2外国語を勉強するときに、どうやって勉強したらいいのかわからないと言われて、そうなのかと気づかされた。英語は自然に身についたものだったので、改めて語学を勉強するとはどういうことか考えなければならなかったということらしい。

😞 国語の成績は壊滅的だった。暗記で補えるものはよいが、読解問題、行間から作者の意図を読み取るなどは特に苦手。

😞 言葉を知らなすぎた。暑中見舞いのハガキをみた小6の息子に「誰が入院したのか？」と聞かれて愕然とした。

友達づくり

😊 帰国子女が少ない学校を選んで入学したら、自分から言わなくても周りの友達が帰国子女だと宣伝してくれて、自分から頑張らなくても友達がどんどん増えた。興味を持ってもらいやすい、覚えてもらうのが早いなど、有利に働いていると感じると話している。

😞 それは、周りが受け入れてくれる環境にいたという点で恵まれていたということ。反対に、あまりよくない印象を持つ友達の中に放り込まれてしまったらしんどい思いをすることになっただろう。「帰国子女」という言葉に対して周囲がどのような印象を持っているかで、子ども自身は正反対の経験をするかもしれない。周りの環境によって帰国子女でよかったことにも、悪かったことにもなりうる。

多様性

😊 我が家の場合、あまりにも多様な価値観を目の当たりにしたために、あまり他人に興味を持たなくなると本人は言っている。価値観は人それぞれ、自分は自分で我が道を行く、周りに合わせる必要もない、と考えているようだ。日本人として「周りに合わせなければいけない」という感覚がある親としては心配することもあるが、子どもにとっては強みになっているのかも。

😊 日本では知ることのできない様々な国のことを身近に知ることができた。生徒だけでなく先生たちも、国、人種、宗教が違ういろいろな国から来ていたので、そういう人たちと付き合ううちに「多様」と意識せずに受け入れていったように思う。文化だけでなく、国の経済力の違い、国際紛争などを間近に感じていた。

アイデンティティ

😊 きょうだいでも子どもによって捉え方が全然違うので、環境以外の要因もあると感じる。帰国生の良さをラッキーだと捉えている兄と、みんなからのイメージと違う自分に落ち込んでしまった弟とは全く正反対とも言える。一番上の姉は幼少期のイギリス、10代のアメリカ生活を経て、イギリスでの大学進学、就職を選択し、今もイギリスでたくましく生きている。性別で決まるわけでもないし、行った国、学校、学年によっても変わってくるのかなと感じる。

アメリカにも住んでいたのに、本人がイギリスを選んだ理由について本人に聞いてはいないが、イギリスではいろいろな国、人種の子どもたちがいる学校だったので居心地がよかったのかもしれない。子どもが小さかった分、ご近所づきあいもとても濃厚で親子ともども周りに助けられることも多かった。

😊 幼稚園年少から小5までをアメリカで過ごし、その後の教育は帰国卒受験や帰国生クラスとは無縁で成長した息子が、社会人になった今、「自分のアイデンティティはアメリカで確立された」とエッセーに書いていたのを見たときには少し驚いた。幼少期に、親も必死で現地に溶け込もうと努力したり、ご近所や子どもたちの友人家族と家族ぐるみで深く関わったりした経験が、彼らのアイデンティティに影響を与えたのだろうか。

😊 社会人になった娘は、会社のホームページで公開している自己紹介欄に「大阪生まれ、ベトナムと中国育ち」と書いていた。ザ・大阪人の中に秘めたユニークな感性は、これまですべての経験が元になっていて、彼女自身それをポジティブに捉えているということかな？と感じた。

生きる力

😊 海外の学校で、言葉も分からない環境に突然放り込まれた経験は、その後の人生の中で生かされている気がする。どこでも生きていくことができそうな気がする、というたくましさはずっと日本にいたら備わっていなかったと思う。

😊 反日暴動を現地で経験した我が子たちは、日本での報道と現実とのギャップを肌で感じていた。情報化社会を生きていく彼らにとって、報道が全てではないということを知るよい経験となった。

かけはしレポート (第 26 回)

子どもをインター校に通わせる親の思い

・はじめに

子連れの海外赴任が決まると現地での子どもの学校選択が大きな問題となってきます。日本人学校、現地校、インター校のどれを選ぶか悩ましいものです。非英語圏においては、日本人学校のない都市や高校生以上の子どもは現地校よりもインター校を選ぶことが多いようです。一口にインター校といっても規模の大小やイギリス、アメリカ、オーストラリア系、さらには IB 教育の有無と様々です。子どもの教育は海外でも継続せねばならないので、親としては自分の子どもに合ったよりよい学校を選びたいと思うのは当然です。本レポートでは、非英語圏でインター校に子どもを通わせている母親に、実際の学校の様子や思いを聞いてみました。インター校を選択肢の一つと考えているみなさんにこの声をお伝えできれば幸いです。

・アンケート調査について

- ① 目的：インター校に子どもを通わせている保護者の意識調査
- ② 実施期間：2022 年 10 月
- ③ 対象：非英語圏 5 カ国のインター校に子どもを通わせる親 5 名
- ④ 質問内容：1 インター校選択の理由 2 日本人教師在籍の有無。それについて思うこと
3 インター校に通う子どもの様子 4 親の思うインター校のいいところ、改善してほしいところ
5 親と学校との関わりについて思うこと 6 インター校に子どもを通わせるのに親に語学力が必要か

・結果 回答者 5 人の子どもについて。カッコ内は在籍部

A さん(幼稚園) B さん(小学部) C さん(中学部) D さん(高等部) E さん(高等部) 以下敬称略

1 インター校選択の理由

- | |
|--|
| A 日本人幼稚園がなく、現地校との 2 択だったので |
| B 海外赴任がどのくらいの期間になるのかわからないことや将来のことを考えて、英語を身につけて欲しいという思いからインター校を選びました |
| C 予定より帰任が先になりそうで、できる限り長く家族一緒に過ごしたかったため |
| D 高校生からの進学だったので、日本人学校がない・現地校は英語ではない。以上の 2 点で、選択肢がインターのみでした |
| E 幼稚園からずっとインターで学んできたから。(高校卒業を意識しての学校選択だったので、これまで学んできた IB カリキュラムを取り入れ、且つ Japanese を選択できることを条件に学校を探しました) |

2 日本人教師在籍の有無。それについて思うこと

- | |
|--|
| A いらっしやいません。それは仕方がないと思う |
| B 1 名いらっしやいます。入学当初英語が全くできなかった子どもにとって、学校生活をサポートして下さる心強い存在でした。また、入学前から日本語で学校についての質問ができたのでありがたかったです |
| C 小学部の ESL 担当で一人、中高の Japanese 担当で一人いらっしやいます。日本人の先生の部屋は、日本人中高生の休み時間の溜まり場としてホッと一息つく場所だったようで、親としてもありがたいことだと思います |
| D いらっしやいます。日本語で相談できる心強さがありました。バカロレアの外国語選択で、日本語が選択できたのが良かったです |
| E はい、いらっしやいます。MYP/DP(中高) Japanese の担当教員ですが、授業以外でも日本人として活動で |

きそうな CAS (Creativity, Action, Service) のサポートや進路相談にも乗ってくださりありがたい存在です。とはいえ、小さいお子さんの保護者にとっては、遠い存在かもしれません

日本人の先生がいらっしゃるということは、親子ともども心強いことでしょう。何かあったときに正確に言葉のニュアンスが伝わる先生がいることはありがたいとみなさん思われているようです。

3 インター校に通う子どもの様子

- A 自由で活発なお子さんが多いように思えます
- B お互いのことを自然と尊重し合っていて、自分と他人の違いをあまり気にしていない感じがします。「みんな違ってみんな良い」という言葉がピッタリだなと感じます
- C 日本のカリキュラムではそこそこ得意だった英語がインターでは全く通用しない上に、あらゆる科目でパソコン必須となり、学習環境の変化に慣れるまではかなり大変そうでした。ESL やスポーツチームへの参加をきっかけにお友だちも増え、それなりに楽しく通っていましたが、どうしてもしんどくてこっそり授業をサボっている時もあったそうです
- D 親が心配している以上に、子どもは適応能力が高く、楽しく通っていました。ただ、コロナでオンライン授業になった時は、友だちにも会えず、勉強のモチベーションを保つのが大変そうでした
- E 小さいうちは自由でのびのび。一方、言葉の壁や文化の違いを感じる中高生は楽しそうにみえても友だち付き合いや勉強に悩んでいる子も結構いるよう

日本の学校であれ、海外のインター校であれ思春期を迎える子どもの悩みは世界共通でしょうか。楽しいことも苦しいこともいろいろな経験を通じて子どもたちは成長していくことでしょう。

4 親の思うインター校のいいところ、改善してほしいところ

いいところ

- A 他の国の文化を知ることができることや日本語以外の言語を身につけることができることです
- B 色々な国の子どもとお友達になれることや、様々な考え方があって良いことを学ぶこと
- C 良い点を認め、褒めてくれること。個々に合わせ採点の基準を設定してくれること(例えば英語力によってエッセイの文字数が違った)
- D 様々な人種の方と話すことで、子どもの思考が多面的に広がるようになったことです
- E 学校自体が世界の縮図で、子どものうちから世の中で起きていることを自分ごととして考えたり、行動したりする機会があること。調査、分析、論述、プレゼンテーションなど実社会で役立つスキルを身につけることができること

改善してほしいところ

- A 必要なものなどの連絡がぎりぎりの期日でくる
- B 突然システム変更が行われて、新学期に入ってからのも事後報告であった。保護者が混乱して大変だった。日本のようなきめ細かな対応が全くされない
- C 授業料が高い
- D 特になし
- E 高すぎる授業料。休みが多すぎる

文化も言葉も国籍も違う子どもたちが一緒に学校生活を送るということは、多様性の中でお互いの存在を認め合う毎日となるのでしょう。現代社会においては価値観の違いを知ることは大切な力だと思われます。不満は授業料の高さと親への連絡の遅さのようです。早めに連絡がある日本の学校のような対応を当たり前と思っはいけないのかもしれませんが。日本の学校より休みが多いと思うと、勉強時間が足りているのかちょっと心配になってしまうのでしょうか。

5 親と学校との関わりについて思うこと

- A 日本の幼稚園のように連絡帳がなかったので、気になった事は直接先生に聞いていました
ほぼ毎日 SNS で園での様子が見られるのでどういう活動をしているのかわかり安心です
- B 先生と保護者の立場が対等な感じがします。学校側ができる事はすぐに改善して下さるし、そうでない時ははっきりと「できない」と言われます
- C 学校は親として自由に訪れることができる場所であるとともに、親自身がコミュニティーの一員として楽しめる場所
- D 子どもが高校生なので、学校と親が関わる機会はあまりない
- E 心配事があれば、いつでも担当の先生にメールで相談できる。そして、適切な対応をして下さったので、ちょうど良い距離を保てていると感じます。非常に関わりが深い

BやEの人の意見から先生と親はフランクに話し合える様子がうかがえます。先生に気軽に相談できて対応していただけるのはありがたい限りです。

6 インター校に子どもを通わせるのに親に語学力が必要か

- A 必要だと思います。スペイン語圏の国でしたが、赴任当初夫も私もスペイン語を話すことができなかった
ので、英語が話せる先生がいらっしゃることで助かった
- B 必要です。学校からの連絡、先生や保護者とのコミュニケーションも英語です
- C 両親ともにある程度の英語力がある方が良いのは確かです。が、親の一人に英語力があり、学校からの情報や懇談、先生とのやりとりをこなすことができ、夫婦間でそれを納得できれば問題ないと思います
- D 親の英語力はあった方がベターですが、必須でなくても大丈夫だと思います。ただ、英語力があつた方が学校や保護者の方と交流できるので、良いとは思いますが
- E 子どもをインターに入れてしまったら、保護者も英語は必須ですね。喋れるじゃなくて喋るんです。日本人は謙遜しすぎということにどれほど早く気づくかがポイントかもしれません(笑)

学校や他の親とのコミュニケーションは大切です。そのためには英語力は必要不可欠なものでしょう。しかし、現在では便利な翻訳や言語変換のアプリなどもあります。これらを利用すれば英語力にやや自信がなくても言いたいことは「はっきり言う」という態度をとることも可能となるでしょう。

・まとめ

インター校の幼稚園、小中高に通わせている保護者に話を聞いてみました。今回話を聞いたどの保護者もおおむね自分の子どもの通う学校には満足しているようですが、一口にインター校といっても千差万別です。選択肢が他になく、学校の対応がひどくて諦めて母子で帰国した例も聞きます。

複数のインター校を経験している会員はこのようなことを話していました。「**どのインターでも共通して言えることは、人に頼って待っていては情報を得られないということです。とにかく学校から届いたメールはしっかり読み、わからなければ調べるか尋ねるとするのは必須です。保護者自身はイベントに不参加でもかまいませんが、子どもを遠足に参加させるかとか、懇談の予約はいつから可能かとか、返信が必要なものなど、大切なお知らせも長いメールに紛れて届きます。英語が苦手なら翻訳アプリに頼ってでも自分で把握して動くということが、保護者の責任ではないでしょうか。**

日本のようなきめ細かな対応は海外の学校では期待できないようです。わからないことは自分から先生や他の保護者に尋ねるといった行動を起こさなくては子どもが不利益を被ることになってしまいます。インター校に子どもを通わせるということに限らず、安全で快適な海外生活を送るためには、周囲の助けも必要なことがあります。他人を頼ることもためらわず、自分の子どもを守るという覚悟と、困難を跳ね返すような強い行動力を親は持つべきなのではないでしょうか。親も子どもと一緒に頑張らなくてははいけませんよね。

異文化でドッキリ! <ご近所(さん)編>

毎回驚きいっぱいの異文化でどっきり。今回は海外でのご近所にまつわるエピソードです。

アパートの一階に住む、まるで執事のような管理人さん。ビルの入り口に着くと飛んで来て、扉を開けて、エレベーターを呼んでくれる。雨の日には傘を持って車のドアを開けてくれる。荷物は上階の玄関まで運んでくれる等等。生まれて初めてお嬢様の扱いを受けた感じ。日本酒をプレゼントすると喜んでくれてさらに扱いが丁寧。この管理人さんごと引っ越したかった。(イタリア)

初のマンション暮らし。ご挨拶に伺うと、お隣は 70 代のとてもオシャレなおばあちゃまの一人暮らし。名前はボットさん! ドイツ語しか通じず、身振り手振りで家族で住むことを伝えたものの、第一印象は少しクールな感じ。ドイツ人は音に敏感と聞き、やんちゃな 2 歳児がいる私には大きなプレッシャーになった。そんなある日エレベーターでお隣さんと遭遇。「アロー」と緊張気味に挨拶すると、ニコッと笑顔でポケットから飴を取り出し、そして息子に手渡してくれた。「えっ」、その時の驚きとホッとした気持ちは今も忘れない。会う度に、飴やチョコレートを頂いたやんちゃ坊主は、すっかりボットさんのファンに! もちろん私も…。世界共通、飴ちゃんは、おばちゃんの必須アイテム?(ドイツ)

子供たちと散歩中、愛犬が目の前で交通事故に遭い亡くなった。そんな時、夫は出張中。ご近所のキャンディは直ぐに駆けつけてくれ、パニックになる私を抱きしめ、一緒に病院へ行き…すべての手配をしてくれた。我が家へ帰るとまずは私を椅子に座らせ、家の中にある愛犬グッズを全て子供たちに車庫に運ばせ、ミルクティーを淹れてくれた。数週間後、近所で同じ犬種が生まれたから運命だと思って見に行こう! と泣き疲れた私を連れ出し、こんないい犬はいない! とその場で名前まで決め…。そして我が家に子犬がやってきた。それから 1 年足らずで我が家は帰国となりキャンディとも涙のお別れ。でも半年後にはなんと大阪まで来てくれて、我が家に滞在し、毎日犬の散歩をしてれた。



よっぽど犬に? 私たちに?
会いたかったんだろうなあ。
(イギリス)

子供が1年生くらいの時、主人が日本出張のお土産に一輪車を買ってきました。大喜びで、最初は家の中で練習していましたが、上手になってくるとそれだけではつまらなくなり、パブリックスペースで乗り始めました。ある日それを見たロシア人のピアノの先生に「サーカスへ行くのか?」と真顔で尋ねられていました。まさかね。(ベトナム)

いつも茶葉を買いに行く市場の馴染みの店で、その日はいろいろと話して選んでいたらお昼時になってしまいました。「昼ご飯食べていきな」と言われ遠慮する間もなく白いご飯と京都のおぼんざいの様な野菜の炒め煮がいくつか出てきて、お店のテーブルでみんなとワイワイしゃべりながら食べました。



「うちのご飯」という感じで質素だけれど美味しく、なにより仲間として認めてもらったようなうれしさがありました。私にとっては北京ダックやフカヒレスープより美味しい中華料理でした。(中国)

引っ越して間もない頃、大きなコリーを 3 匹連れた素敵な女性と知り合った。エクアドル系アメリカ人で名前はマルガリータ。どんなに大きな犬にも怯まない我が家の小型犬は、彼女たちに会うと尻尾をフリフリ。ある日、彼女の大きなおうちに招待されて行ってみると…玄関に出てきた彼女の手には、大きな木のスプーンにたっぷりのピーナッツバター。あっという間にペロッと舐めた我が愛犬は、それからますますマルガリータの虜になった。(アメリカ)

辺りから聞こえてくる騒々しさに窓を開けて庭を見た。すると、先の方で黒煙と高く上がった火柱が！お隣のたき火から出火し、庭を仕切る垣根に燃え移ったのだった。気が動転した私はただ娘を抱きかかえておろおろしていると、お向いさんやら、反対側のお隣さんやらがバタバタと我が家に駆けつけてくれた。そして両側から消火が始まった。素晴らしい関係プレーにより、少し時間はかかったものの無事に鎮火。そして歓声が上がった。「ご近所さんの底力」に感動したできごとだった。(イギリス)

現在、夫の赴任に伴い、タイのシラチャという海沿いの街に住んでいます。運動不足解消とご近所探検のため、近くにある小さな島へ時々ウォーキングに行きます。この島には幾つかお寺があり(タイのパワースポットらしい)、仏様、観音様、中国やインドの神様などが、あちこちにまつられています。お供えのお線香や蓮の花等を売っている店の方と仲良くなり、言葉がわからないまま身振り手振りで勧められたのが、なんと魚の放流。100 バーツ(約 380 円)で魚を 2 匹買い、雨樋状の筒に流して海へ放つ。実はこれ「タム ブウン」といって徳を積む大切な行いだとか。仏教の国タイならではの心が穏やかになるひと時でした。(タイ)



アパートのお隣さんは、あご髭三つ編みのお父さん、お母さん、5 歳と 3 歳の子どものドイツ人家族。ハロウィンかぼちゃが家の前に



置いてあったから
←お菓子をおいた。
すると、これが→
届いた。日本語頑張ったね。(ドイツ)



当時、サウジでは国教のイスラムが厳しく、クリスマス時期の緑と赤のイルミネーションさえ禁止。とはいえ外人専用の住宅地はほとんど治外法権のような感じで、クリスマスなどのキリスト教の行事も楽しむことができました。ハロウィンも、「協力してくれる家は玄関灯をつけて目印にしてください」とお知らせがあり、お菓子を準備して楽しみにしていました。ある年、ハロウィンの日をすっかり忘れて、玄関灯をつけたまま出掛けてしまいました。近くまで帰ったら家の前に子どもたちが…。「あっ」と思ったけれど時すでに遅し。次の家へ向かって行くのを見送り、そーっと家に入りました。子どもたち、ごめんね。(サウジアラビア)

ヨルダンのアンマンは標高が高く、夏には近隣諸国から沢山の人が避暑にやってきます。ある日、アパートの大家さんが「お隣に来ているサウジ人が羊肉をあげたいと言っているが受け取ってくれるか？」と尋ねて来ました。大家さんによると、イスラム教の巡礼月最終日の「犠牲祭」に、各家庭で生贄として捧げた羊を、周りの人に分け与える風習があるとのこと。承知すると、しばらくして呼び鈴がなり、少年がレジ袋に入ったお肉を渡してくれました。「ありがとう」と受け取ったものの、なんだか生温かい…。そこで、今朝まで生きていた羊であることを実感！大急ぎで冷蔵庫に入れて翌日会社の人たちとの BBQ に持っていきました。若かった私には、袋を開け、お肉を切る勇気はありませんでした。(ヨルダン)

海外の学校を紹介します

フランクフルト日本人国際学校

C.N.

わたしは小学1年生から小学3年生の1学期まで、ドイツのフランクフルトに住んでいました。フランクフルトはドイツの中西部にあり、日本と同じように春、夏、秋、冬があります。住宅街の近くにも自然がたくさんで、公園には、りすやうさぎ、かも、白鳥などの野生の動物がいます。

わたしが通ったフランクフルト日本人国際学校は、ハウゼンという地区にあり、日本人もたくさん住んでいます。学校はトラム(路面電車)の駅とバス停の近くなので、お友達の中にはトラムやバスで登下校する人もいました。学校の中には体育館と広いグラウンドがあり、休み時間の時はお友達と鬼ごっこやサッカーをしたり、すべり台やブランコなどの遊具で遊んだりしました。また、小学校や中学校だけではなく幼稚園もあるのでとてもにぎやかです。授業は日本の学校とだいたい同じですが、週に2~3回ドイツ語の時間とマインの時間がありました。マイン

の時間とは、パソコンを使った授業のことで、パソコンの使い方やキーボードの打ち方などを習いました。ドイツ語の授業は知らない言葉がたくさんではじめは大変だったけど、ドイツ語の歌をおどりながらみんなで歌ったり、先生がおもしろいふりつけをしたりしてくれたので、とても楽しかったし覚えやすかったです。

学校行事もたくさんありました。運動会、学校祭、遠足、現地校との交流会、クリスマス集会、もちつき大会などです。クリスマス集会の時にはニコラスさんが来てくれました。ニコラスさんはドイツのサンタクロースで、いい子にはみかんやチョコレートのプレゼントをくれて、悪い子にはつえでおしりをたたきます。わたしは毎年プレゼントをもらえたので良かったと思いました。学校行事の中でわたしが楽しかったことは、運動会でみんなとおどったダンスと OPEL ZOO という動物園に遠足に行ったことです。運動会でおどったダンスは、さいしょ、ふりつけはかんたんだ！と思っていたのですが、とてもむずかしくて何回も何回も練習をしました。本番の時はどきどきしましたが、うまくいったのでとてもほっとしました。OPEL ZOO は2年生の時に行きました。グループにわかれて動物園の中をたんけんします。2年生はリーダーになって、どの動物を見に行くか考えたり、1年生のお世話をしたりしました。わたしが1番楽しみにしていた動物はヤギです。なぜかという、ヤギにえさをあげることができたからです。ヤギにニンジン

をあげると、ポリポリと音を立てて食べていたところがかっこ良かったです。だけど、ヤギがニンジンをどんどん口の中に入れていくので、自分の指が食べられると思います。少しだけこわかったです。

世界中でコロナのまん延が広がり、わたしが小学2年生の時にはドイツはロックダウンになりました。学校の授業もオンラインになって行事も少なかったですが、お友達や先生と学校で会えた時はとてもうれしかったです。またいつかフランクフルトのお友達に会いに遊びに行きたいです。



ハウゼン地区にてお友達との下校の様子



遠足で行った OPEL ZOO

イギリス訪問記

H. O.

今年の9月、夫と二人で久しぶりにイギリスを訪れた。幼い2人の子どもたちを連れて滞在したのは、もう19年も昔。6年間の滞在中に次男が生まれ、念願の犬も飼い、家族が増えて帰国した。のちに長女と長男はイギリスの大学に進学し、長女は今もロンドンで働いている。私たち夫婦にとってイギリスは、ずっとつながっている特別な場所だ。

飛行機のチケットは半年前に予約を入れていたが、長引くコロナ禍で本当に行けるのかどうかぎりぎりまで半信半疑だった。出発前日には運よく帰国前のPCR検査が解除となり、ほっとして飛行機に乗った。いつもなら13時間のフライトが今は約15時間。ロシア上空を避けてアラスカの上を回って飛ぶ長いフライトだった。飛行機の窓から牛や馬、羊のいるイギリスの放牧地が見えたときは、本当に嬉しかった。空港からロンドン市内に向かう電車の窓からは、大きな虹が2つも見えた。雨が降ったり止んだり陽が差したりのお天気も懐かしい。駅で待っていてくれた娘に会えた時は、なりふり構わずにハグをした。



今回の旅の目的は、娘に会うこと、そして昔住んでいたご近所の友人たちに会うことだった。当時住んでいたのはロンドン市内から電車で1時間ほどの郊外で、サリー州にある小さな町。その頃は程よい数の日本人が住んでいて、のんびりと穏やかなところだった。駅に着くと、懐かしい風景が次々と目に入ってくる。駅前のハイストリートを抜けて、緑のトンネルのフットパスを歩くと、かつての我が家のあるクローズ(袋小路)に繋がる。そこはまるで町内会かのようにほとんどが顔見知りだった。ご近所同士の問題も多々あったが、拙い英語で幼い子どもたちと犬の散歩をしていた私たち日本人家族に、皆とても親切にしてくれた。

今回の旅で最初に伺ったのは、イラン人の友人の家。彼女は昔、子どもの送り迎えをする車の中から、いつも私たちに満面の笑顔で手を振ってくれた。丸々と太った日本人の赤ちゃんがとってもかわいく見えたらしい。今でも時折励ましのメッセージを送ってくれる彼女は私にとって姉のような存在で、再会のこの日をずっと楽しみに待っていてくれた。華やかで前向きで、心の暖かい人だ。初めて聞いた話だったが、彼女の初恋の相手は日本人だったそう。小学生だった彼女と彼は言葉こそ交わさなかったけれど、「彼はいつもこんな目でアイコンタクトを取ってくれたのよ」と目じりを引っ張りながら話してくれた。

我が家の左隣は、アイルランド人の老夫婦。今は故郷に行ったり来たりされていて、ちょうどその前日にロンドンへ戻ってこられたそう。お二人のアイルランド訛りの英語が懐かしい。昔、お庭で18歳の盛大なバースデイパーティをしていた娘さんは、今は35歳で2児の母。お互いの近況報告の後には、懐かしい思い出話が止まらない。

右隣はイギリス人のおばあちゃん。その頃いつもジョークを言って子どもたちを笑わせてくれた旦那さんはもう亡くなられてしまっていたが、彼女のお庭は昔と変わらず手入れされた素敵なイングリッシュガーデンだった。彼女がフェンスの下からかわいがってくれていた我が家の犬が去年亡くなったことを話すと、とても悲しがってくれた。

こんなに時間も距離も離れていたのに、不思議なくらいに落ち着く場所。心温かい隣人たち。いつかまたみんなに会いたい。去年は我が家からのクリスマスカードが届かず、とても心配したと皆に言われた。昨年末は慌ただしく、コロナ禍に紛れてさぼってしまったのだ…。今年は必ず出すね!と約束してきたので、今から写真を探している。

学校案内編集チームより



『帰国生への学校案内《関西》2023』の発刊を終えて

今年も多くみなさまにご協力をいただき、無事に学校案内を発刊することができました。編集チーム一同、心より感謝いたします。

今年のテーマは「SDGs への取り組み」。学校がどのような取り組みを行っているかを先生に取材して「かけはしより」に載せました。また、帰国生へ SDGs についてのアンケートを行い、帰国生が海外でどのような取り組みをしていたかを「かけはし特別リポート」の記事にしました。他にも、ご自身も帰国生で今は高校教師として帰国生を近くで見ている先生にお話をおうかがいした「かけはしセミナー2022」要旨、「大学入試基礎知識」やホットでできる「コラム」もありますので、ぜひ取材記事以外もご覧ください。

◇学校の先生方のご協力と会員のチームワークで、今年も発刊することができました。少しでも情報が必要な方々に届きますように！

◇おかげさまで今年も何とか無事に発刊することができました。ご協力いただいたすべての方に感謝です。

◇母親目線で作った学校案内です。かけはしならではの学校情報が、ひとりでも多くの帰国生のお役に立てますように。

◇今年は各学校のようすがよくわかるように写真を多く掲載しました。帰国生の学校選びの一助になりますように。

かけはし PR チームより



SNS で発信

かけはしのInstagramアカウントを開設して2年が経ちました。毎年発刊する『帰国生への学校案内《関西》』がコロナ禍で2021年度版は休刊となったことから「頑張る受験生にエールを送りたい」という思いで、学校案内の掲載校からいただいた応援メッセージの投稿をスタートしました。活動報告やイベントの紹介もコツコツ発信し、今年の夏は学校案内の訪問取材校の紹介も網羅することができました。

気軽に情報発信できて、沢山のひと々と繋がれる SNS。休日のお出かけスポットやレストランもInstagramを利用して検索しています。DM(メッセージ機能)を使えば予約も完了です。投稿管

理も携帯一つでできてしまいます。ひと昔前では考えられない情報発信です。頑張って投稿していますが、写真のアングルや加工には苦しむときがあり、センスと若さ(頭の柔軟さ)が欲しいと嘆くことも少なくありません。かけはしのアカウントを見つけてくださった方、また、見てくださっている方、励みになりますので、フォローやコメントしていただけると嬉しいです。



KAKEHASHI.KANSAI



「レッツトーク 2022 秋」実施報告

3年ぶりの対面でのレッツトーク。海外子女教育振興財団から3名の先生もご参加くださり、賑やかに開催されました。これから渡航する予定の方、帰国後間もない方、帰国生としてのお子さんの受験を控えた方、海外経験はないがお子さんをバイリンガル・バイカルチャーとして育てたい方、状況はさまざまですがみなさん共通しておられたのが、「海外での子育ての話をしてできる場がない」ということでした。

経験の豊富な財団の先生のお話や会員の体験談を聞き、ゲストの方同士の交流を持ったことでお帰りの際にはみなさん笑顔になってくださったことが、私たちの何よりの喜びでした。また、財団の先生が「相談者の方がお子さんの悩みをここまでお話しできるのは、かけはしが同じ経験を経たお母さんたちの集まりだからですね。まさにこれがかけはしの強みですね」とおっしゃってくださったことで、私たちも大変勇気をいただきました。

リモートでの開催の良さも経験しましたが、やはり対面でのお話は気持ちの伝わり方が違うなあと、自身が10年も前に初めてレッツトークに参加した時のことを思い出しました。

ご参加くださったみなさま、ありがとうございました。次回またお会いいたしましょう。



2022年11月17日 大阪にて開催

*写真はプライバシー保護のため画像処理をしています。



会員のつづやき



 タイの人達は、オシャレが大好き。特にピアスは、プチプラから高級品まで素敵なデザインがたくさんあります。イヤリング派の私は眺めているだけでしたが、ある日出会ったのが小さな水晶のイヤークフ。耳元が少しキラキラするので、嬉しくなっています。(Ibu Anak Cinta)

 ダンボール箱で作る燻製と炊飯器で作る低温調理にはまっています。案外簡単でとてもおいしいので家族に大好評！そこらの居酒屋さんにも負けてないと思います。一つだけ残念なのは、お酒が弱い自分。もうちょっと飲めたらもっとおいしいだろうな。(アルカマル)

 久しぶりに会った友だちとの楽しいおしゃべりタイム。ふと気づくと外がすっかり暗くなっている。「しまった！まだ夕飯の支度してへん。そんなに長居したっけ？」と慌てて時計を見た。ふう、まだまだ大丈夫。ここは北緯52度、北の果ての国。冬の日暮れはとても早い。(あろまま)

 施設にいる義母の家の渋柿が今年は箱2つ分も採れた。身内分を家でつるし、残りは「干し柿お好き？作ってみませんか？」と人に届けてやれやれ…。「楽しみができたわ」「どのくらいでできあがり？」と柿つながりでしばらく盛り上がりそう。久しぶりの面会で義母は「かめへんけど。柿なんてあったかな？」(アロー)



編集後記



定期的に利用する新幹線の最大の楽しみは車窓から見える富士山。何度見ても感動し、きれいに見れば必ず写真に収めたくなるのは私だけではないらしい。車両のどこかでシャッター音が響く。今回は珍しく日没直後。シルエットだけが浮かぶ雄姿もまた美しい。



会報48号いかがでしたか。ご意見、ご感想をぜひお寄せください。

2022 年 10 月 発刊 好評発売中!!

関西圏学校情報誌 『帰国生への学校案内《関西》2023』

近畿 2 府 4 県の小・中・高 50 校と教育委員会を帰国生の保護者の目線で取材しました。在籍する帰国生や保護者の声も載せて詳しく紹介した学校案内です。



編集テーマ 「SDGs への取り組み」

《特集記事》 かけはしセミナー要旨

「昔の帰国生・今の帰国生」 講師：大阪府立住吉高等学校首席 清水寛史先生
特別リポート「SDGs-帰国生の体験」

《基礎知識》 出国前に気をつけること、帰国への準備、海外/日本の学校への入学・編入学、他
大学入試基礎知識、英語保持教室・予備校情報、他

《取材記事》 受験情報、特色、在籍帰国生・保護者の声、先生のお話、他

《コラム》 「帰国生こぼれ話～帰国後泣き笑い集～」 「帰国後の勉強～困ったこと・うまくいったこと～」
「海外での家族の思い出〈食べ物編〉」 「異文化でドッキリ！〈言い回し編〉」

A4 判・350 ページ 2,900 円(税込・送料別) ISBN 978-4-9908226-6-8

お申し込みは、かけはし HP ご購入フォームより。Amazon でもご購入いただけます。



笹井 さゆり

ご賛助くださっているみなさま (敬称略、順不同)

パナソニック株式会社 川崎重工業株式会社 樟蔭中学校・高等学校
立命館守山中学校・高等学校 啓明学院中学校・高等学校 高槻中学校・高等学校
関西大倉中学校・高等学校 早稲田摂陵中学校・高等学校
大阪国際中学校高等学校 樋口正和(小林聖心女子学院中学校・高等学校教頭)
辻本久夫(関西学院大学非常勤講師) 匿名(団体) 匿名(個人)

♪かけはし会員募集中♪

< 関西帰国生親の会かけはし編 >

Email: kakehashi@kansai.email.ne.jp URL: <http://www.ne.jp/asahi/kakehashi/kikoku/>

copyright © 2022 関西帰国生親の会かけはし All Rights Reserved

